

# 人文科学 I

## 目次

世界史	1
西洋哲学史	36
西洋美術史・音楽史	38
西洋文学史	40
地理	43
(世界地図)	54

# 世界史

## I 序 ～近代とは何か

### 1 なぜ近代史か

現在の我々の社会の原型は、近代西洋で形成された

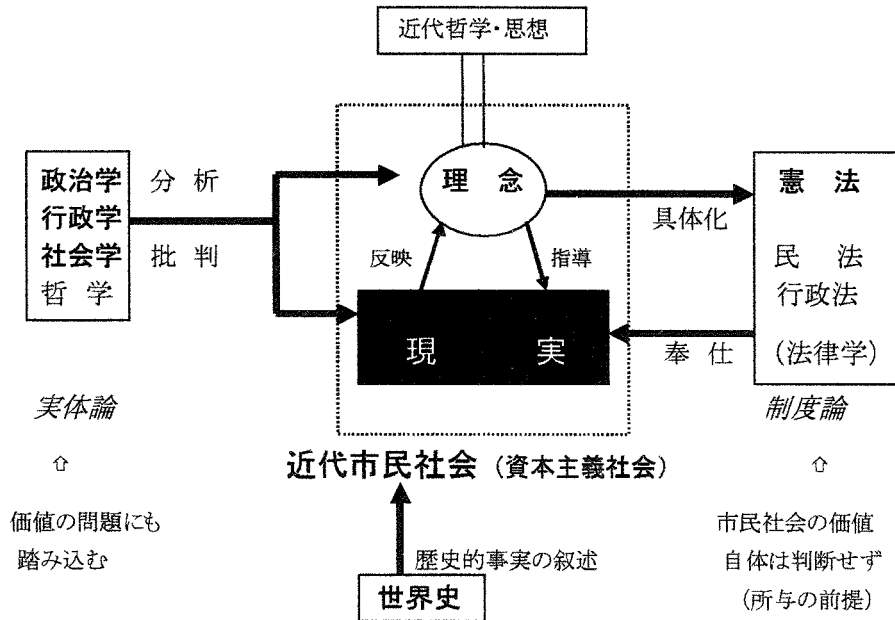
↳ それゆえ

現在の社会で通用している制度や思想、学問を理解するには、近代という時代がどのような意味を持っているのかを把握する必要がある

↳ さらに

近代という時代を理解することで、その問題点を認識し、新しい時代の価値を創造するヒントを発見できる

### 2 近代史と公務員試験科目との関係



#### (視点) 現代社会における理念と現実の乖離

20c以降の現代社会においても近代の理念は生き続けているが、社会の現実との乖離が甚だしくなっている。そのため、近代の理念を表現した制度(憲法)が現実社会に適応し得なくなって来たり、政治学や行政学から批判を受けている。

### 3 「近代（モダン）」とは何か

近代社会

17-8 世紀頃から西ヨーロッパに出現し、19 世紀後半に完成した社会形態。身分関係から解放された**自由な個人**により形成され、経済的には**資本主義**、政治的には**民主主義**、文化的には**個人主義**に基づく。また、**科学主義**・**合理主義**を賞揚する。

※ いずれの概念も時間をかけて歴史的に形成（日本は明治期にインスタントに輸入）

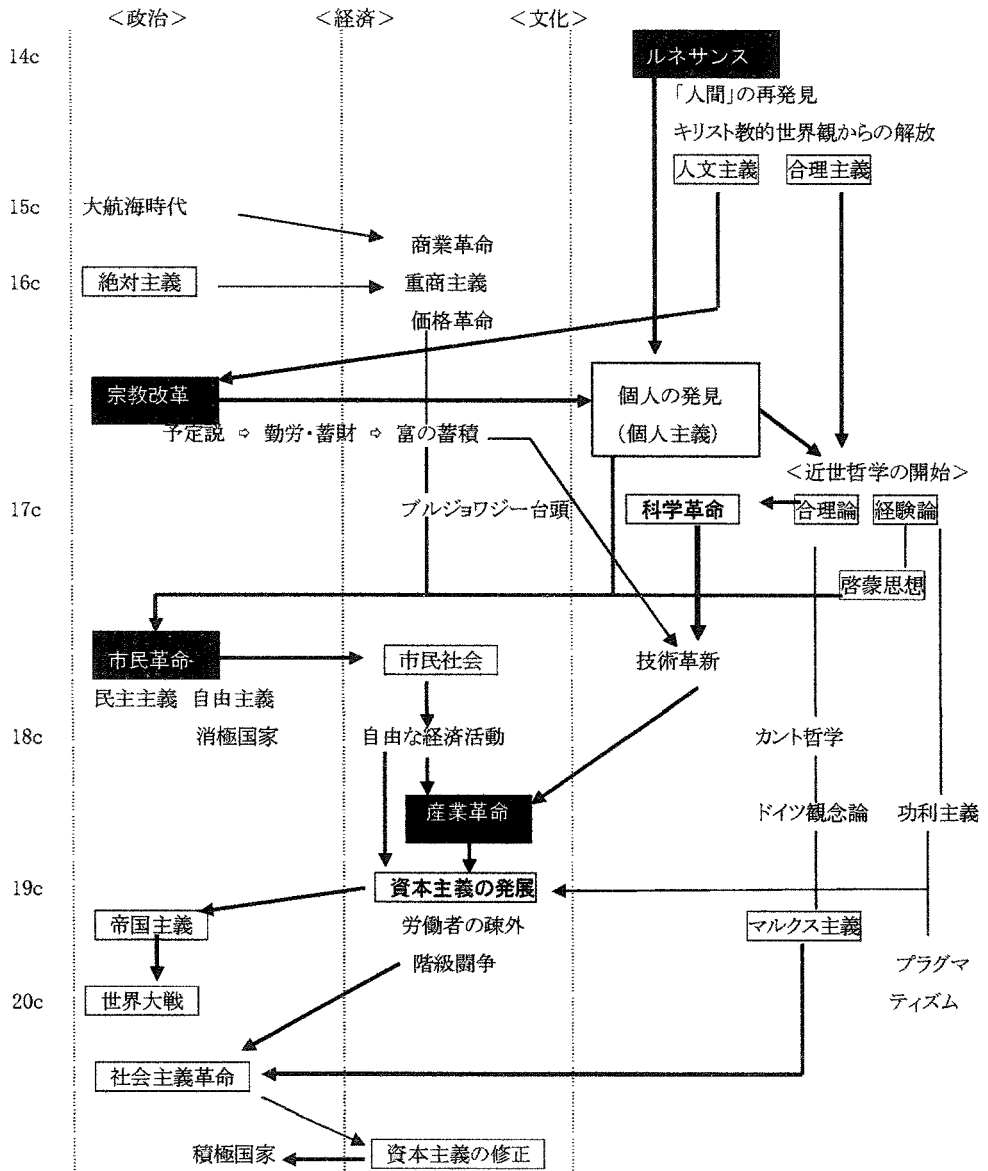
<近代社会のキーワード>

人間中心主義、個人主義（自由主義）、理性中心主義（合理主義）、進歩史観（科学主義）

#### 西洋史の時代区分

古代	前8c	ギリシャでポリス成立	ギリシャ・ローマ都市文化
	前6c	ローマで共和政はじまる	
	4c	ローマ帝国がキリスト教公認 →国教化	
中世	5c	西ローマ滅亡	封建制度
	14c	イタリアでルネサンス始まる	
近代	17c		個人主義・合理主義
	19c		民主主義・資本主義
現代	20c	2度の世界大戦	ポスト・モダン＝近代への反省

#### 4 西洋近代史の概観



※歴史上の出来事は全て因果の連鎖である。どれ一つ欠けても、今の我々が享受している近代的な生活はなかったことを知ってほしい。

## II 近代の幕開け ～ルネサンスと宗教改革

### 1 ルネサンス (14-16c)

14 世紀にイタリアで発祥した、古代ギリシャ・ローマ文化を模範とし、カトリックの価値観にとらわれない個人の自由な目で人間と世界を眺めようとした精神運動。各人の個性の発揮が促され、数多くの天才的芸術家を輩出した。＝「再生」、文芸復興

#### 【意義】

世界(自然)と人間(私)についての近代的な理解の出発点→宗教改革を準備

ギリシャ・ローマ古典文化(キリスト教以前)の再生 ⇨ 人間中心主義文化の開花

教会の束縛から人間を解放 → 近代文化の基盤である「個」の覚醒

神ではなく、人間に対する関心 → 個性(個人の価値)が自覚される

#### 【イタリア＝ルネサンスの背景】

- ・地中海貿易による有力都市の経済的繁栄←強い意志力と合理的精神を兼ね備えた新興商人  
ex.  家(フィレンツェ)
- ・ローマ時代の古典文化遺産が豊富
- ・ 帝国の滅亡→学者が文献を携え移住⇒人文主義者による古典文献の研究興隆

#### 【展開】

■  (1304-74・伊)：「古典の復興」(1330年代)

中世は不毛の暗黒時代であり、古典文化こそ人類の想像力が頂点に達した時代とみなす

→神学に代わって古典学を賞揚

→言語・文学・歴史・哲学・科学等を、信仰のためではなくそれ自身のために追究

→芸術的・学問的創造力の爆発→古典への復帰にとどまらず、新しい時代をもたらす

14c～文学から開始(人間を中心とした世界の観察、人間的感情や欲望、世俗生活の描写等)

『抒情詩集』、 『神曲』、 『デカメロン』

15c～美術 …  『ヴィーナスの誕生』、 『最後の晩餐』、

『最後の審判』、『ダヴィデ像』、ラファエロ『聖母子像』

マキャベリ(伊)『君主論』、セルバンテス(西)『ドン＝キホーテ』、トマス＝モア(英)

『ユートピア』、シェイクスピア(英)、モンテーニュ(仏)『随想録』

(三大発明) ①火薬 (→ヨーロッパ人が火砲発明→騎士没落、新大陸征服)

いずれも ②羅針盤 (→大航海時代)

元は宗代 ③活版印刷術 (独・グーテンベルク)・15c半→宗教改革)

(科学) コペルニクス (ポーランド・『天球回転論』(1543) 地動説) →ガリレオ(伊 1564-1642)

(建築) サン＝ピエトロ大聖堂 (伊、ルネサンス様式、ブラマンテ、ミケランジェロ)

## 2 宗教改革 (16c)

腐敗・墮落したカトリックの教義を否定し、聖書や初期キリスト教の精神に立ち返って、個人を神の前に立たせ、ひたむきな内面的信仰による救いを目指そうとする改革

【意義】教皇を頂点とする全ヨーロッパ的キリスト教世界秩序を根底から揺るがす

信仰によってのみ神の恩寵が得られる→神と人との間に教会が介在することを否定  
聖書から直接神の言葉を学ぶ→信仰の純粹化・内面化・個人化

【背景】当時の独: [ ] 帝国 = 教皇庁の重要な財源 (=ローマの牝牛)

→擄取への反発(商工業者)

ルネサンスの進展→人文主義者による聖書の研究→誤りの指摘、原始キリスト教の見直し

【展開】

■エラスムス(1469-1536・ネ)『新版・新約聖書』『キリスト教戦士必携』

↓  
~聖書の福音の真理に立返ることを主張(福音主義)

『[ ]』~教皇・高位聖職者の贅沢な生活や民衆の無知を諷刺

■ルター(1483-1546・独・ヴイッテンベルグ大学教授)

1517 95カ条の論題発表→贖宥状(教皇[ ]が発行)を批判

人間は信仰によってのみ救済→聖書を通じて神の言葉に直接接する→カトリック教会否定

1521 教皇から破門、皇帝[ ]が自説撤回要求(ヴォルムスの帝国議会)→拒否

ザクセン選帝侯の保護下で聖書のドイツ語訳完成→ドイツ語圏に広まる

1555 [ ]の宗教和議 領主が新教・旧教を選択でき、領民はそれに従う

■カルヴァン(1509-64・仏)

1541 ジュネーヴ市政掌握→神権政治実施(厳格な禁欲主義、長老主義導入)

「[ ]説」:救済は最初から予定されており、人間の意志は介入できない

神から与えられた地上での使命 = 儉約(禁欲)と勤労による富の蓄財を奨励

→禁欲の職業倫理が中産階級市民に受け入れられ、資本の蓄積が進んだ

※ [ ]『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(1904-5)

→ルター派よりも急進的で、聖書を重視→ユグノー(仏)、ピューリタン(英)、ゴイセン(蘭)

■ [ ](英・在位 1509-47)

1534 国王至上法(首長法)により[ ]会を設立し、

ローマ・カトリックの傘下から独立

→政治(国家)を宗教的権力から解放、修道院の土地財産没収(絶対王政への足がかり)

1559 [ ]が統一法制定により国教会確立(カルヴァン主義採用)

【対抗宗教改革】

1534 イグナティウス=ロヨラ(スペイン)がイエズス会結成

→フランシスコ=ザビエルらと新大陸やアジア、アフリカにも布教

1545 トリエント公会議(~63) 教皇の至上権を再確認、宗教裁判所を強化→思想統制

### 3 大航海時代 (15-6c)

#### 【背景】

- ① マゼラン 『世界の記述(東方見聞録)』によりアジアへの関心高まる
- ② 香辛料等の特産物をイスラム商人(オスマン帝国)を経ずに直接入手  
→莫大な富の獲得
- ③ キリスト教布教活動→とくにイエズス会
- ④ 航海技術の進歩(←羅針盤の発明)

【目的】 領土征服(新大陸) ⇒通商(印・中・アジア) ⇒布教

#### 【経過】

(ポルトガル) エンリケ航海王子が推進

- 1488 バルトロメウ=ディアス が喜望峰に到達  
1498 ヴァスコ=ダ=ガマ がインド西岸のカリカットに到達  
1500 カブラル がブラジルに漂着
- 1510 インドのゴア 占領 →香辛料貿易の拠点～スリランカ、マラッカ、モルッカ諸島支配  
1557 マカオに居住権獲得 →中国貿易の拠点

(スペイン)

- 1492 コロンブス が西回りでインドに出発←トスカネリの地球球体説、女王イサベル が支援  
→カリブ海のサンサルバドル島に到着、アメリカ大陸にも上陸  
→アメリゴ=ヴェスプッチ により新大陸であることが明らかになる
- 1519 マゼラン (ポルトガル人) が西回りの世界周航に出発  
→フィリピンに到達後死亡(21)、部下が帰国(22・史上初の世界周航)
- 1521 コルテス がアステカ王国(メキシコ)を滅ぼす  
1533 ピサロ がインカ帝国(ペルー)を滅ぼす

#### 【影響】 →世界の一体化

- ①ヨーロッパの商業が世界規模になり、貿易活動の中心が地中海から大西洋へ移行(商業革命)
- ②海外市場が広がり、資本主義経済が発達  
cf.東欧では西欧に穀物を輸出するため、農業が主となり、農奴支配強化(東西分業体制)
- ③新大陸の銀が西欧に大量流入→物価上昇(価格革命)
- ④西欧中心主義の始まり～西欧が世界の中心であり、他の地域の人々を啓蒙し、世界を発展へと導く使命を有しているという優越意識の芽生え

#### 4 絶対王政の確立(16-18c)

##### 【意義】

16～18世紀にかけてヨーロッパで成立した、強力な王権による**中央集権的専制支配体制**  
 主権を持つ国家(主権国家)を基本的枠組みとする国際社会のあり方が定まった(1648 **ウエストファリア**条約)。国内的には個人の活動領域が一国全体に広がった。

##### 【背景】

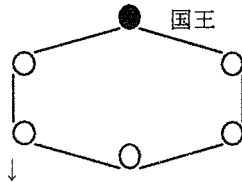
- ① 貨幣経済の発展→経済圏拡大の必要→地方を割拠する諸侯が邪魔
- ② 戦争の長期化・大規模化→兵員・戦費調達必要性 ⇒商人が国王と結びつく

##### 【特色】

- ①  と  による中央集権国家
- ②  説による正当化
- ③  主義政策と植民地獲得

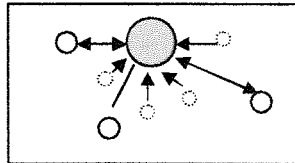
##### 【変遷】

西洋中世社会  
 (封建制社会)

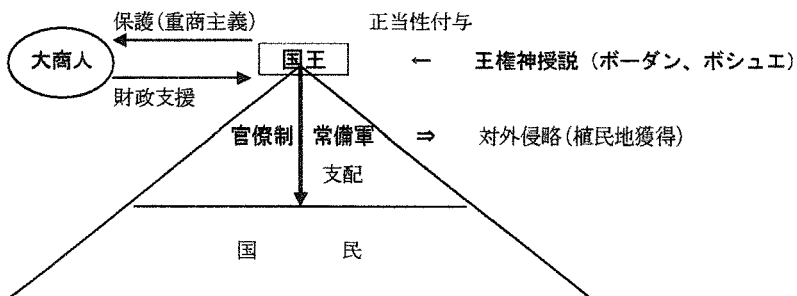


国王と土着権力の緩やかな結合関係

貨幣経済の発展による市場拡大  
 イタリア戦争長期化(1494～1559)に伴う戦費調達の必要性  
 ↓ ←国王と大商人が手を組む  
 封建貴族の没落と国王権力の伸張



政治権力が**国王**に集中  
 ↓  
 君主による**統一的支配**



##### □王権神授説

君主権は神から授けられた神聖不可侵のもので、国民はこれに絶対服従すべきだとする説  
 (意義) 教会の権威や封建領主の権力に対する絶対的優位性主張→**主権の確立**



## □重商主義

国内外の金・銀山を開発し、輸出促進と輸入抑制により国内に金銀を蓄積(重金主義)する主義  
(背景)絶対王政を支える官僚と常備軍を維持するには膨大な資金が必要  
(意義)国内産業を保護し、資本主義の誕生を早める ex.コルベール(1619-83)ルイ14世の財政総監

## <西欧諸国における絶対王政の確立と展開>

【西】1479 スペイン王国成立→1492 イベリア半島統一(グラナダ陥落、)完了)  
1494 条約(ポルトガルと新世界分割)  
1516 世(ハプスブルク家)即位(=神聖ローマ皇帝カール5世)絶対王政確立  
1556 世即位→71 海戦(オスマン帝国撃破)、80 ポルトガル併合  
中南米植民地の金銀独占→「太陽の沈まぬ国」

【蘭】1568 戦争(～1609オラニエ公ウィレム)開始→79ユトレヒト同盟(北部7州)  
1581 ネーデルラント連邦共和国独立宣言(英が支援)→共和制  
1602 連合東インド会社設立()～香辛料貿易の拠点  
1614 植民地(北米)建設 →ニューアムステルダム建設  
1623 事件→英をインドネシアから排除し東アジア貿易の海上覇権獲得  
1652 ケープ植民地(南アフリカ)建設  
戦争(～54)で敗北→海上覇権を失って衰退→英が海上覇権を握る

【英】1485 世即位(朝)絶対王政の基礎整備  
1509 世即位 →34国王至上法 絶対王政確立  
1553 メアリ1世即位→スペインと結びカトリック復活を企てる  
1558 世即位(～1603)～絶対王政絶頂期  
1559 令により英国教会確立  
1588 無敵艦隊(アルマダ、西)撃破  
1600 設立(カルカッタ)→インド進出→植民地拡大  
1603 世即位(朝)～王権神授説を唱え専制政治、国教会主義強調  
1620 ピルグリム=ファーザーズ(ピューリタン)の渡米 →ニューイングランド植民地

【仏】1562 戦争勃発(～98) サン=バルテルミの虐殺(72)←カトリック=ド=メディシス  
1589 新教派の世即位(家)→カトリックに改宗  
1598 の勅令→ユグノーに信教の自由保障  
1610 ルイ13世即位→15 解散 絶対王政確立(宰相)  
1643 世即位(太陽王～1715)→宰相、財務長官登用  
1648 の乱(マザランが鎮圧)  
1685 ナントの勅令廃止→ユグノー弾圧→商工業者が国外亡命し、経済発展が遅れる  
1700 継承戦争 仏×奥・英・蘭→13 条約でブルボン家王位継承  
1754 戦争で英に敗北 →カナダ、ルイジアナ等失う